



松村昌家 (著),
『大英帝国博覧会の歴史
— ロンドン・マンチェスター二都物語』
Masaie MATSUMURA, *A History
of the British Empire Exhibitions:
A Tale of Two Cities, London and Manchester*
(xv+274 頁, ミネルヴァ書房, 2014 年 5 月,
本体価格 3,800 円)
ISBN: 9784623067640

(評) 青木 健
ken AOKI

外国における歴史上の博覧会を、通り一遍のガイド・ブックや事典類とは違って、構想の発端・形成過程・歴史的意味付け・博覧会相互のつながり等を通して深く研究しようとした場合、どのような難問が待ち構えているだろうか。膨大な資料収集の問題、そして、その国の歴史・文化・社会の知識を中心に包括的な歴史の流れを認識した上で、収集した資料を整理する問題、各博覧会の成立事情を踏まえての全体的な構想、博覧会相互の関係の把握と確認、表現型式と論理性の問題等々、想像しただけでも気が遠くなる。いずれをとっても、長年の学問的蓄積が前提となる。以上の様々な難問に挑戦しようとする本書は、いかなるメッセージを伝えようと言うのだろうか。

本書は、十九世紀半ばから二十世紀の初頭にかけて、つまりヴィクトリア朝の最盛期に、英国で開催された複数の博覧会を、詳細に論じた英国博覧会の歴史である。他の類書と比較して、本書の著しい特色は図版の多さ(170 点に近い図版)にある。このことに関して、著者はかつて「文章が足りないところは、これらの図版によって補っていただき、また文章を読むのに飽きたお方は、これらの図版を目で追いながら……楽しんでいただけたら幸い」(『水晶宮物語』あとがき)だと鷹揚に応じているが、これは、逆に言えば、内容の濃さを示唆していると解釈できる。事実、著者は、博覧会が成功か失敗かといった大まかな発想ではなく、夥しい資料を精査して、博覧会の形成過程や展示品の収蔵のプロセス、展示品にまつわるエピソード等を、人的ネットワークをからませながら複合的に論じている。そこでは、博覧会という無機質な世界に生命が吹き込まれ、しばしば興味深いドラマが生まれる。

たとえば、Part 1（「第一回万国博覧会と水晶宮」）でのジョゼフ・パクストンに関わるエピソード。彼がたまたま園芸家としてかつて大温室の設計に携わっていたことと、水晶宮内の楡の木の問題とは何のつながりもない。しかし、彼の発想力・先見力・決断力がふたつを結び付け、半円形のガラス張り天井を持つ袖廊を構想し、ピンチをチャンスに転換させて活路を見出すプロセスは、偶然と人間力が溶け合ってドラマを生んでいる。このように、転換や再評価の結果生じるドラマが所々に配されており、読者を愉ませる。

周知のように、著者は1986年に『水晶宮物語』（リプロポート刊）を上梓しており、研究者・ジャーナリストその他から高い評価を得ている。本書のPart 1及びPart 2の大筋は、それを踏襲している。しかし、実際にはほとんど書き直されており、新しい構想のもとでの再出発の決意が感じられる。旧著について、著者は「水晶宮の歴史を、一つの物語として構成して見たかった」（文庫版あとがき）と語っており、そこでは、水晶宮が人の一生に譬えられて、その誕生（開催）から死（焼失）までが物語風に描かれている。とりわけ最終章の焼失の場面は、貴重な図版数点が挿入された上、数頁にわたって記述されている。これに対して、本書では水晶宮の焼失への言及はわずか2行である。その図版もない。

旧著が「完結した物語」とするなら、本書は「連続性と関係性をはらむ歴史」を柱として、物語は二次的な扱いとなっている。この変換によって、著者がより広い視野を獲得し、対象を包括的に見ることを可能にしたと思う。著者の挑戦は、したがって、該博な知識を武器に、美術史・文化史・社会史等に関わる膨大な資料を有機的に結び合わせ、多くの図版を添えて、博覧会史をダイナミックなものに変えることになろう。「博覧会の歴史」は言い換えれば「博覧会の連鎖」を意味する。したがって、各Part [全体は五つのPartにわけられている]で論じられる博覧会は、その存在意義を示す独自の特色を持つと同時に、相互に何らかのつながりを維持することになる。

Part 2（「シドナムの水晶宮」）について、かつて著者は「シドナムに移り、大きく変容を遂げたのちの水晶宮は、万博の水晶宮ではないのである……水晶宮は二つの役割をもったものとしてみなければならない」（『水晶宮物語』文庫版あとがき）と言っており、早い段階でシドナムの水晶宮の役割を決めていたと思われる。それは、「民衆教育と娯楽」というアルバート公が掲げる課題の具体化とされる。会場内に建設された広大な音楽堂や図書館、さまざまなテーマ・パークと花火大会。「民衆の教育と娯楽の殿堂」として独自の任務を果たした末、この水晶宮は85年の「生涯」を閉じる。本書では、この「終焉」が実は「大英帝国博覧会の歴史」の「はじまり」と捉えられている。「博覧会の歴史」はそこからどのように展開し、またそのメッセージとは何か。

Part 3 で取り上げられる「マンチェスター美術名宝博覧会」については、会場がロンドンでなく、なぜ黒煙の町マンチェスターなのかという素朴な疑問があったし、類書もこの博覧会を省略していたと言う。しかし、著者は、この疑問に敢然と挑戦して、常識を覆し、再評価することによって、この博覧会に新しい意味を付与することに努める。というのも、「第一に美術名宝博の歴史の把握が、黒煙の工業都市マンチェスターのイメージの変換に通じるからである。……それはマンチェスターの製造業者や商人たちに対する再認識、再評価に通じる」（まえがき viii）からであるとする。第二は、直前の1855年のパリ万博での絵画を中心とした「美術部門」の影響だと言い、さらに、第一回万博での美術部門の劣悪さへの反省が加わったとしている。英仏間の博覧会レースを通じて、よい意味での刺激が博覧会のレベル・アップに貢献し、英国博覧会の歴史に影響を与えたことを著者は冒頭から繰り返し強調している。的確な指摘である。

ここで、著者は、以上の理由を裏付ける名宝博の内実を具体的に探っていく。まず、美術名宝博の歴史的意義を理解するには、マンチェスターの町とマンチェスターの製造業者やエンジニアといった、富裕な新興中産階級の人たちに対するイメージを変える必要があると主張。その根拠は、彼らの趣味の変化と美的開眼が、名宝博と深く関わっているからだとする。この指摘は脱帽ものである。これらを明らかにするために、著者は美術史的・文化史的・社会史的視点を借りて、マンチェスター及びマンチェスター・マンに対する通念の変換を読者に迫る。

マンチェスター・マンたちの「趣味の変質」と「美的開眼」は、読者にもう一つの「重要課題」を突きつけることになる。それは、展示された美術作品に対する、彼らによる再評価についてである。1850年代に根強くはびこっていたラファエル前派への誤謬と偏見を越えて、マンチェスターの新興中産階級がそれを容認し、新たに評価し直す一連の活動を著者は辛抱強く説く。それは、まさに美術史を塗り替える作業である。「マンチェスター美術名宝博覧会はその[ラファエル前派の]歴史の一ページを飾り、且つその後における歴史の形成に大きく寄与していると断言してよい」（163頁）と力強く述べて、著者は、この博覧会の歴史的重要性を強調する。同じように、彼らが初期イタリア絵画への新しい評価をもたらしたことを、実例をもって証明する。その分析は、論理の骨格がきちんと整っており説得力に富む。

マンチェスター美術名宝博覧会の特徴は、さらに「ハーフォード・コレクション」及び「スーラージュ・コレクション」に関する文化史的考察によって浮き彫りになる。前者の収蔵のプロセスは、ここでも偶然性と関係性のドラマを生み、読者の知識欲を刺激する。著者はこう締めくくっている。「1855年のパリ万博の美術部門における審査委員長としての経験が、ハーフォード卿とマンチェスター

名宝博とを結びつける一本の絆の役割を果たしたことは疑い得ない」(127頁)。さらに、イタリア装飾美術の逸品を中心とするスーラージュ・コレクション購入の経過でも、人と人とのつながりの環が波及的に拡大する様相を根気よく追求める。下手な反論は無用である。

時間と空間の合間に人と人のつながりを追う文化史的方法は、英国近代絵画の人と作品の解説にも応用され、エピソードに溢れた説明と図版は読者を飽きさせない。かくして、「マンチェスター美術名宝博と第一回万博とは、アルバート公の理念と実践を通じて緊密につながる。すなわちヴィクトリア時代における博覧会の連鎖が成り立つ」(114頁)として、「博覧会の連続性」を保障する。数々の興味深い重要な要因を含んでいるマンチェスター美術名宝博覧会を「大英帝国博覧会の歴史」に組み入れたばかりでなく、「ロンドン・マンチェスター二都物語」という副題を付けた著者の意図は、十分報いられたと言ってよい。

Part 4 で論じられる第二回万国博覧会(1862年)もまた、独自性と関係性をあわせ持つ独特の博覧会として描かれる。「英国博覧会の歴史」の要件をまず充足させるのは、ピクチャー・ギャラリーズに展示された豊かな絵画類であり、それらはパリ万博の刺激を受けて、マンチェスター美術名宝博覧会に継承された「民衆における美術趣味の普及浸透」という要件を充たしたとする。出品された英国絵画は、ホウガースを始め、レノルズ、ゲインズバラ等の十八世紀の画家の作品及び十九世紀の画家の作品が中心であり、その解説は、なじみの画家と作品に関するエピソードに溢れていて、添えられた図版にも助けられて読者にとって楽しい会話となる。

他方で、第二回万国博覧会の特徴が、第一回万国博覧会との違いにあることが明らかにされる。第一に、それまでの博覧会の精神的シンボルであったアルバート公の急逝による寂寥感。第一回万国博覧会開会式での王室と民衆の接近は「平和の祭典」を演出したが、今や女王は喪に服し、開会式の宣言もいとこのケンブリッジ公爵によって代行される。その光景を描いた *ILN* の挿絵は、たしかに華やかさに欠けている。さらに重要な違いは、展示品の質的变化にあると言う。寂寥感とは対照的に、五一年万博から六二年万博(国際博)に至る10年間に、相次ぐ戦争を経験した英国社会に緊張感が漂うようになったこと、そして産業の様変わりとともに、必然的に博覧会の展示品にもそれが表れていることを著者は鋭く指摘して、歴史の変容を示唆する。

図版の多くは、出品物に関するものであり、読者はその美術的・文化史的意義を楽しむのだが、時に図版が論旨を効果的に表わす例がある。たとえば、次の二様の諷刺画は、この時代の変化を極めて効果的に暗示している。一つは、ジョージ・クルックシャンクの「全世界が一八五一年万博見学へ」(175頁)、他の一つ

は、「平和の女神」(176頁)と題するもの。著者はこう説明を加えている。「前者は……万博はすなわち世界の平和の象徴として描きあらわされているのに対して、後者は、恐ろしい武器の登場を嘆き悲しむ平和の女神を描いている」(175頁)。『パンチ』(1862年5月3日号)に描かれた後者の「平和の女神」は、アームストロング砲に腰かけて憂鬱そうな視線を投げかけている。効果を最大限引き出した絶妙な図版の提示である。

続いて、分析の対象は、女神が腰かけていたアームストロング砲へと移り、それが、様々な戦争における英国の苦境を打開するために開発されたこと、この最新兵器の製造過程、戦争における貢献度、生産工場を持つウーリッジ王立兵器工場に関する情報等がもたらされる。その直後、突然の場面転換のように、論述の対象が変わり、それまでとは異なる側面に焦点が当てられる。幕末遣欧使節団への言及である。たしかに、六二年万国博覧会(国際博覧会)の開会式場には、7名の日本人の予想外の姿が*ILN*に絵入りで紹介されている。

この使節団の目的や英国での視察の意味などについて、本書は深入りせず、もっぱら博覧会とのつながりを追う。このシフトは、一見唐突に見えるが、著者は、Part 1(五一年万博)で、中国展示品にまぎれ込んだ日本製品への英国人の注目度について、「[英国人の目に留まったことが、彼らの]東洋趣味を呼び起こし、それがまた日本趣味の覚醒を促した」(77頁)と述べているし、Part 2(「シドナムの水晶宮」)においても、水晶宮を見学した岩倉欧米使節団に読者の目を向けさせた。Part 3(「マンチェスター美術名宝博」)では、わずかに戦国時代の甲冑に言及があるだけだが、Part 4では、博覧会臨席を始め遣欧使節団の英国での視察の様子などにも触れ、それまであまり語られなかった日本の姿が前面に躍り出る。ここに、著者の周到な仕掛けが感じられる。というのも、Part 4では博覧会会場に日本製品展示場(日本コーナー)が設けられたことに関連して、非常に重要な記述がなされるからである。この展示品に対する日英の異なる反応から、日本の高い技術力と工芸力に対する英国人の驚きを明らかにし、そこにジャポニズムの源流を見出す。鋭い洞察である。さらに、著者は、六二年第二回万国博覧会への遣欧使節団の登場を「日英交流の幕開けを画する」(182頁)とまで言いきり、その重要性を強調する。日英交流史の観点からも重要な指摘と言える。

たしかに、日本はその後の半世紀の間に、西洋先進諸国と肩を並べるために、猛烈な勢いで近代化への道をひた走った。大英帝国博覧会の歴史の文脈でいうなら、半世紀後の「日英博覧会 イン・ロンドン」(1910年、Part 5)で見せる、日本のパワーの源流はここにあったのかもしれない。その意味でも、一見読者を戸惑わせるような、その実、連続と続くことになる日英交流の源を突き止めるために、遣欧使節団を「英国博覧会の歴史」に組み入れた著者の先見性は見事である。

Part 5の「日英博覧会 イン・ロンドン」開催までおよそ半世紀が経過しており、日本が英国に追いつくには、それだけの時間が必要であったことが暗示されている。そこでは、日英の力関係の変化を象徴するように、日本の展示品の数と様態が英国のそれを凌駕している。しかし、ここでは、今まで意義深く機能していた「意味のある偶然」も、それが生み出すドラマも、日本のリアリズムに押し流されてしまったようだ。そのようなロマンは通用しない時代へ突入したのだ。著者が苦勞して集めた数々の図版が、近代化を急ぐ日本の姿をあらわにするにつけ、第一回万博が目指した「平和の祭典」が、失われた歴史の一ページとの思いに駆られるのは書評子のみではないだろう。日本の美術と庭園のみが、イギリス人の興味を引いたとする、突き放したような著者の言葉には含蓄がある。

積み重ねられた学識とあくなき探究心。それらによって、著者は通念を転換して、再認識・再評価の過程を経て、新たな発想への道を切り拓いた。本書は、ヴィクトリア朝文化に関心を持つ読者のみならず、様々な分野の人たちをも魅了する力作である。